The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平成16年度事業報告
Author(s)	
Citation	癌と人. 2006, 33, p. 36-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23610
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平成16年度　事業報告

(財)大阪癌研究会

1．一般学術研究助成について

癌に関する学術研究を奨励助成するため，昭和61年度から実施している「一般学術研究助成事業」は，本年度で19年の歴史を重ねております。

今年度も，「悪性腫瘍の診断と治療に関する基礎的並びに臨床的研究」をテーマにしたものを対象に，全国100研究機関から公募したところ59名の応募があった。

一般学術研究助成選考委員会で審議の結果，助成候補者12名を選出し，委員長名で理事長に答申した。この答申をもとに理事会で審議のうえ，答申のあった12名を助成金交付対象者とし，1人当たり500千円の交付を決定した。

なお，助成対象者は「別表1」のとおりである。

2．癌シンポジウム・講演会等の開催経費の助成について

癌の予防・診断及び治療に関する研究の連絡・提携の促進を図り，癌の医療の進歩普及に貢献するため，本財団の主たる事業の一つとして平成9年度から実施している「癌シンポジウム・講演会等の開催経費の助成事業」については，癌シンポジウム・講演会等の代表者から助成申請のあったものを，癌シンポジウム・講演会等の奨励助成に関する選考委員会で審議し，審議結果について委員長名で理事長に答申され，理事会で慎重審議のうえ18件に助成した。

助成した18件の内訳は「別表2」のとおりであるが，その内の数件について研究成果報告をもとに，その概要を紹介すると次のとおりである。

(1) 第23回 Microwave Surgery 研究会（代表：平尾佳彦）

特別講演は田伏克惇理事長（NPO Microwave Surgery 研究会）の司会の下に「マイクロ波組織凝固機器発展の道のり」について，本機器の開発者である銭谷利男氏（平和電子工業株式会社）に「マイクロ波メスの開発と EMC について」の講演をいただいた。

特別企画として　シンポジウムⅠでは　野浪敏明教授（愛知医科大学消化器外科学）の司会で「ディベート　切除か，凝固か」をテーマに，2基調講演として「小肝癌に対する肝切除は経皮治療に優るか？」が佐々木洋先生（大阪府立成人病センター消化器外科）から，また，「肝細胞癌に対する局所治療の現状と展望」が關寿人教授（関西医科大学肝臓内科）から報告され，一般応募の6演題と合わせて，演者と会場参加者の活発な討論があった。

シンポジウムⅡでは井戸健一教授（自治医科大学内視鏡部）の司会の下に「MTC：新しい工夫」に関する公募シンポが行われ，泌尿器科領域，消化器内科領域，消化器外科領域から4演題の基礎的検討結果が報告された。

ランチョンセミナーでは，石河修教授（大阪市立大学女性病態医学）の司会の下で MTC 治療の新領域として肺腫瘍ならびに過多月経への応用とリアルタイム MR ナビゲーションによる Microwave Surgery が報告され，新しい展開に大いな期待がもたれた。

一般演題は消化器内科，消化器外科，肝臓外科，婦人科，泌尿器科，呼吸器外科などから多彩な22演題が報告され，会場参加者を含めて活発な討論が行われた。

(2) 第17回バイオセラピィ学会における国際シンポジウム（代表：安元公正）

①国際シンポジウムのテーマ

Tumor antigen and vaccine Strategy

獲得免疫による癌治療の Breakthrough

座長：Hideaki Tahara (The University of Tokyo),

Hiroshi Shiku (Mie University, Mie, Japan),

Keynote lecture Thierry Boon(LICR, Brussels, Belgium)

T cell responses of melanoma patients vaccinated with defined tumor antigens.

i) Yutaka Kawakami(Keio University, Japan),

Identification of human tumor antigens by various immunological and genetic methods

ii) Kwong Tsang(NCI, NIH, Bethesda, USA),

Activation of human T lymphocytes against defined epitopes and agonist epitopes of human tumor associated antigens

iii) Noriyuki Sato(Sapporo Medical University, Sapporo, Japan),

Human tumor peptide vaccines and immunogenic potentiation

iv) Hiroshi Shiku(Mie University, Mie, Japan).

Cellular and humoral immune responses in patients vaccinated with a novel antigen delivery system of hydrophobized polysaccharide-HER2 protein complex(CHP-HER2)

②国際シンポジウムの要旨

まず最初に，ベルギー，ルドビック癌研究所のブーン先生からは，これまでにヨーロッパで行われている悪性黒色腫に対するワクチン療法の臨床試験の現況について報告があった。その詳細な免疫学的モニタリングの結果を示すとともに，これからワクチン療法がどうあるべきかについての基調講演があった。

続いて，慶応大学先端医科学研究所　河上裕先生より，さまざまな手法を用いた抗原同定，つまり従来の cDNA ライブラリー発現クローニング法や SEREX 法，さらに最近進歩の著しいゲノム解析の手法（SAGE 法や GeneChip による解析）が示され，より効率のよい抗原の同定についての講演がなされた。

アメリカ，NIH の Kwong Tsang 先生からは，既知の抗原である CEA，PSA, MUC1 の新しいエピトープを，reverse immunology の手法で，同定し，さらに wild type ペプチドに対して，改変ペプチドを作製し腫瘍特異性を損なうことなく，抗原性をあげることが報告された。

札幌医科大学の病理学第一講座の佐藤昇志先生からは，Survivin 2B や SYT-SSX ペプチドの抗原同定とその臨床応用について，さらに heat shock protein とペプチドの複合体を用いることで，抗原提示細胞において効率的なクロスプレゼンテーションがおこり，効果が増強された免疫応答が引き起こせることについて講演がなされた。

次に講演予定であったドイツの Ulrick Keilholz 先生は，残念ながら，直前の飛行機トラブルで来日が出来なくなってしまい，講演をお聞きすることができなかった。

最後に，三重大学第二内科の珠玖洋先生から，疎水多糖体ペプチド(CHP-HER2 複合体癌ワクチンを用いて，あたらしい抗原デリバリーシステムが示された。つまり CHP-HER2 を貪食した抗原提示細胞は，効率良く HLA class I および class II に提示しうることを明らかにした。さらに

CHP-HER2 を用いた臨床試験の進捗状況および免疫学的モニタリングの結果について講演があった。

③成果について

以上のように，腫瘍免疫における最先端研究を行っている施設より，最新の情報が公開され，また活発に討論が行われた。各研究者間の情報交換は充分になされたと思われ，本シンポジウムのこれからの癌免疫療法にもたらした成果と意義は，多大なものがあると考えられる。

(3) 東京消化器癌化学療法研究会（報告者：藤井雅志）

1. 進行・再発胃癌に対する CPT-11＋TS-1 併用療法第Ⅱ相臨床試験 Start Meeting

平成 16 年 9 月 17 日に東京，山の上ホテルで進行・再発胃癌に対する CPT-11＋TS-1 併用療法第Ⅱ相臨床試験 Start Meeting を開いた。

本試験に参加している 11 施設から約 30 名の医師が集まり，第Ⅰ相試験での有効症例の報告と第Ⅱ相試験のプロトコール変更点の確認をし，了承された事で，第Ⅱ相試験の登録をスタートした。

また，参加施設の福島県立医科大学第 1 外科寺島雅典先生から今年の ASCO のトピックスについて報告され，活発な意見交換がなされ有意義な会となった。

2. TSGCC（東京消化器癌化学療法研究会）11 月例会

平成 16 年 11 月 26 日に東京，山の上ホテルで東京消化器癌化学療法研究会の 11 月例会を開催した。

今回は胃癌，大腸癌試験の進行状況の報告と東京医科大学病院第三外科勝又健次先生から有効症例の報告，駿河台日本大学病院消化器外科藤井雅志先生から ICACT のトピックスについて報告された。その他連絡事項があり新規プロトコールの募集が開始された。

3. TSGCC（東京消化器癌化学療法研究会）12 月例会

平成 16 年 12 月 17 日に東京，山の上ホテルで東京消化器癌化学療法研究会の 12 月例会を開催した。

今回は胃癌，大腸癌試験の進行状況の報告とその他今後の予定等，連絡事項があった。

4. 進行・再発胃癌に対する CPT-11＋TS-1 第Ⅰ相臨床試験部分中間症例検討会

平成 17 年 1 月 28 日に東京，山の上ホテルで「進行・再発胃癌に対する CPT-11＋TS-1 第Ⅰ相臨床試験部分中間症例検討会」を行った。

本会では胃癌試験第Ⅰ相部分の症例の効果判定，副作用状況の確認を行った。

5. TSGCC（東京消化器癌化学療法研究会）2 月例会

平成 17 年 2 月 25 日に東京，山の上ホテルで東京消化器癌化学療法研究会の 2 月例会を開催した。

今回は胃癌，大腸癌試験の進行状況の報告と昭和大学附属豊洲病院佐藤温先生から有効症例の報告，先月行った胃癌試験の中間検討結果の報告を行った。

なお，東京消化器癌化学療法研究会では総会，研究会のほかに学術講演会も積極的に開催し，各研究分野の先生を招いて癌治療に関する情報を幅広く集め，医療現場への普及に鋭意努力していく予定である。

また，今年度は海外の学会（ICACT，ASCO）に医師を派遣し，最新の癌治療に関する情報収

集を行った。

また，平成 17 年の秋に，日本癌治療学会にて，進行・再発胃癌に対する CPT-11＋TS-1 併用療法第Ⅰ/Ⅱ相臨床試験の最終報告，進行・再発大腸癌に対する CPT-11＋TS-1 併用療法第Ⅰ相臨床試験の中間報告を行う予定である。

(4) 癌治療における椎茸菌糸体抽出物の有用性検討会（代表：螺良英郎）

当検討会に参加し研究されている施設は 9 施設（岐阜大学医学部第 2 外科，広島大学原爆放射能医学研究所腫瘍外科，山口大学医学部第 2 外科，京都府立医科大学消化器外科，東京女子医科大学附属第 2 病院外科，近畿大学医学部外科（下部消化管），佐賀社会保険病院，富山医科薬科大学医学部（成人看護学・外科系），福岡大学医学部微生物・免疫学教室で，今年度は大阪にて 2 回の検討会を開催。

昨年度に引き続いて，L.E.M.（椎茸菌糸体抽出物）の転移性抑制効果に関する免疫学的検討，L.E.M.の in vitro 免疫能因子に及ぼす影響に関する検討，L.E.M.の癌患者治療に際しての免疫学的影響ならびに Quality of Life に及ぼす影響などに関してデータを蓄積する。

今後も本剤の役割について検討を進めていく予定である。

(5) 第 9 回国際インターベンショナルラジオロジー／血管造影シンポジウム，第 34 回日本血管造影・インターベンショナルラジオロジー学会総会ジョイントミーティング（代表：中村仁信）

1. 実施内容および成果

IVR とは X 線透視装置などの画像診断の機器のガイド下に，メスをいれること無く体表から病巣にアプローチして治療する患者にやさしい低侵襲治療法であり，X 線透視下にカテーテルを肝臓の動脈に送り込み，動脈血流を遮断して肝臓癌を切らずに治療する肝動脈塞栓術（TAE）はその代表的な手技の一つである。日本はこの治療法の研究では世界をリードする立場にある。今回の会議では「Re-Progress with Alliances toward the Future」をテーマに IVR の先端領域の演題を公募した結果，本邦のみならず参加各国における今後の IVR の進歩，発展に大きく貢献していくものと考えられる。

成果としては，癌などの腫瘍の制御や血管・非血管系の低侵襲性治療等，多彩な分野における研究発表（一般演題；160 題）のほか，国内外の著名な研究者によるシンポジウム 41 題，ランチョンセミナー5 題，キーノートレクチャー10 題などの講演が行われ，低侵襲性治療の発展の歴史，現状での問題点から将来の展望までを含めて活発な議論が行われた。また若手臨床医の低侵襲性治療への参加を促す活動として，3 例の症例検討，8 回の技術教育セミナーが行われた。

2. 今後予想される効果

「門脈圧亢進に伴う静脈癌の治療の第一選択として大循環シャントを作成するか，静脈瘤を硬化させる方法をとるか」に代表されるように，欧米とアジアで同一疾患に対して治療指針が異なることは論文発表の傾向からも知られていた。これは発想・文化の違いや患者の体格の違いなどによるが，本大会で背景にある医療制度や文化の土壌にまで踏み込んで彼我の第一人者の間で討論がなされたことは，国内の IVR 専門家のみならず，欧米の IVR 専門家にとっても新たな境地を展開する一助となり，今後の IVR 発展のために多大な寄与があったと思われる。また，海外における IVR の新しいデバイスや治療法の紹介は，今後の国内での IVR の発展の方向を示唆するものであり，関係業界にとって展望を示す大きな情報源になった。

3．癌の知識普及活動について

本財団の会誌「癌と人」の第31号を刊行し，全国の癌研究機関の研究者をはじめ，一般市民向けに主に関西を中心とした地方公共団体の健康管理センターや福利施設，及び，賛助会員等に無償で配布し，癌に対する正しい知識の普及活動に鋭意努力した。

ガンの代表的な症状

ガンには特異的な症状はないものの，つぎのような代表的症状がいくつか考えられます。

●しこり・腫れ

からだの表面に近いところにできたしこりや腫れは，手で触れることができる場合があり，目で見て確認できる場合もあります。

乳ガンでは，乳房にほかの部分よりかたいしこりを触れることがあり，甲状腺ガンでは，くびの前側の部分にできたしこりを触れることがあります。

胃ガン，肝ガン，膵ガン，大腸ガンなどの腹部にできたガンでは，おなかにしこりを触れることがあります。

また，わきの下や腿のつけ根などのリンパ節が腫れてきて受診し，ガンが発見されることもあります。ただし，リンパ節の腫れは，ガン以外の病気でもおこってくるので，それだけで必ずしもガンだとはいえません。

さらに，皮膚ガンの場合は，目で見て異常に気づくことができます。痛みやかゆみのないできものが発生して，比較的短時間の間に，大きさ・色・形などの変化がおきた場合や，いつまでも治らない潰瘍が皮膚にできていたら，早く皮膚科医を受診しましょう。

●出　血

ガン細胞からの出血は，ガンの種類や発生した部位によっていろいろな症状となって現われてきます。代表的なものは，血痰，吐血・喀血，血便・血尿などですが，これらの症状はガン以外の病気でもおこるため，やはりこれだけでカンとは診断できません。

〈血痰，喀血，吐血〉 肺ガンが進行してくると，少量の血痰が連日出るようになります。喀血も肺ガンなどで現われる症状です。吐血・下血は胃ガンなど消化器にできたガンなどでおこってきます。

〈血尿〉 血液（赤血球）が混じっている尿を血尿と呼び，含まれている血液の量が多く，見た目にも血尿とわかる肉眼的血尿と，血液の量がわずかで，尿を顕微鏡でしらべなければわからない**顕微鏡的血尿**とがあります。

このうち自覚できるのは肉眼的血尿だけですが，腎臓，膀胱などの尿路系にガンが発生すると，血尿が現われてきます。とくにいったん現われた血尿が短時日のうちに消えてしまい，半年以上もたってかた再発する場合は泌尿器にガンが発生していることを知らせる信号のことがあります。

血尿に気づいたら，すぐに泌尿器科医を受診してください。

〈下血や血便〉 大腸ガンの代表的な症状です。肛門に近い直腸や下行結腸の場合は，見た目にもわかる出血となって現われますが，肛門から遠い上行結腸や胃からの出血では，黒っぽい便として出るだけで，なかなか血便とは気づかないことが多いものです。

〈不正性器出血〉 女性性器のガンで現われる不正性器出血は，月経による出血とまちがわれることがよくあります。ふだんから，生理のサイクルとそのときの特徴をよく知っておくことが必要です。

●痛　み

ガンの病巣が骨・筋肉・神経をおかしたり，神経を圧迫したりすると，いろいろな痛みがおこってきます。

食道ガン，肺ガンなどでおこってくる胸痛，脊髄腫瘍などでおこる背部痛や腰痛，消化器のガンや女性性器のガンでおこってくる腹部の痛みなど，痛みはガン特有の症状ではないものの，もっとも強く自覚できる症状です。

いままでに感じたことがない痛み，時間を追って痛みが強くなる場合などは，ガンをはじめ重い病気の症状のことがあるので，早く医師の診察を受けましょう。

小川一誠・田口鐵男 監修――「ガンの早期発見と治療の手引き」より引用――

別表　1

平成16年度「一般学術研究助成金」助成対象者

氏　名	所　属　機　関	研　究　テ　ー　マ
吉　田　健　一 (34歳)	明治大学農学部生命科学科	悪性腫瘍の診断・治療を目指した細胞周期関連遺伝子群の機能解析
中　西　　真 (43歳)	名古屋市立大学大学院 医学研究科代謝細胞生化学2	抗がん剤感受性を規定するチェックポイント制御遺伝子群の同定
森　井　英　一 (40歳)	大阪大学大学院医学系研究科 病理病態学講座	腫瘍ワクチンの効果にマスト細胞が果たす役割の解析
濱　田　浩　一 (34歳)	秋田大学医学部 構造機能医学講座	P13K/PTEN 経路による血管新生とそれによる腫瘍の進展性の制御
難　波　大　輔 (30歳)	愛媛大学医学部 分子細胞生命科学講座	膜結合型細胞増殖因子 proHB-EGF のカルボキシ末端断片(HB-EGF-C)を介した新規細胞内シグナルによる細胞増殖制御機構
金　井　好　克 (45歳)	杏林大学医学部 薬理学教室	新規腫瘍細胞型必須アミノ酸トランスポータ LAT3 を標的とした腫瘍増殖抑制効果の検討
伊　藤　光　宏 (41歳)	神戸大学医学部附属病院 血液腫瘍内科	転写コアクチベーターTRAP220 を介した癌制御のための基礎的解析
時　野　隆　至 (44歳)	札幌医科大学がん研究所 分子生物学部門	有糸分裂チェックポイント遺伝子 CHFR を標的とした微小管阻害性抗癌剤の感受性診断および癌治療への応用
原　田　浩　徳 (41歳)	広島大学病院	AML1 点突然変異を持つ MDS/AML における発症機序の解明
松　本　義　久 (34歳)	東京大学大学院医学系研究科 附属疾患生命工学センター 放射線研究領域	DNA 二重鎖センサーDNA-PK を指標とした新しい放射線感受性・癌罹患性予測法の開発
金　岡　　繁 (43歳)	浜松医科大学医学部	糞便中の mRNA を標的にした大腸癌診断法の確立
小野寺　雅　史 (45歳)	筑波大学人間総合科学研究科	レトロウイルスベクターを用いた養子免疫遺伝子細胞治療の確立

別表　2

平成16年度「癌シンポジウム・講演会等助成費」助成対象者

単位：千円

研究等の名称	代表者	助成金額	備考
第23回 Microwave Surgery 研究会	平尾佳彦	4,512.5	
婦人科悪性腫瘍の診断・治療におけるガイドラインの作成検討会	梅咲直彦	4,398.5	
なには乳癌研究会	芝　英一	1,425	
第11回大阪がん検診治療研究会	藤田昌英	200	
個別化癌化学療法研究グループ	冨田尚裕	4,750	
大阪消化管がん化学療法研究会	古河　洋	5,700	
第17回日本バイオセラピィ学会総会における国際シンポジウム	安元公正	3,895	
腎細胞癌の予後因子解明に関する研究会	平尾佳彦	4,750	
東京消化器癌化学療法研究会	北島政樹	4,750	
癌治療における椎茸菌糸体抽出物の有用性検討会	螺良英郎	14,250	
Kobe Breast Cancer Oncology Group	河野範男	2,850	
第9回国際インターベンショナルラジオロジー・血管造影シンポジウム及び第34回日本血管造影インターベンショナルラジオロジー学会総会ジョイントミーティング	中村仁信	3,078	
市立吹田市民病院大腸癌研究グループ	村田幸平	950	
札幌局所療法研究会	本間久登	950	
乳癌PST研究会	増田慎三	950	
大阪地区の悪性リンパ腫についての多施設共同臨床研究	青笹克之	8,550	
大阪乳癌臨床治療研究会	芝　英一	950	
大阪術後イレウス研究会	大植雅之	475	
合計(18件)		67,384	